淀川愛好会 YODORIC NEWS

No.91　2020 年 9 月発行

==========

〈 社会人の窓 11 〉

コロナ禍中の「ゆく河の流れ」

山根 敬三

「ゆく河の流れは絶えずして、しかも、もとの水にあらず。淀みに浮かぶうたかたは、かつ消え､かつ結びて、久しくとどまりたるためしなし。世の中にある人と栖（すみか）と、又かくのごとし。」この文章は周知の通り、『徒然草』『枕草子』と共に大学受験の出題頻度が高い、鴨長明の『方丈記』の書き出しのくだりです。達観した人生観を記したものだと思い込んでいた私が、この書が平安時代末期の災害文学、災害記録としても貴重な文献である事を知ったのは、四半世紀も後になってからのことでした。

建暦 2 年（1212 年）鎌倉時代初期に出されたこの書の前半部には、それを遡ること 35 年余の間に、偶然にも京に集中した五大災厄、つまり「安元の大火」「治承の辻風（竜巻)」「福原（神戸）遷都」「養和の飢饉」「元暦の大地震」について、その災厄による市中の悲惨な有り様が、あたかも現地報告のような迫力で記されています。そこには長明自身の心情の吐露を含みつつも、被災の描写については、京の災害史と古地図とを読み併せてみても実に写実的で、長明の記憶と記録の緻密さには驚かされます。

天気予報や警報等の情報網や医療・防災技術等が整っていない状況下での階級社会にあって、続発する災厄による死傷や疫病、飢餓と裏腹の人心がすさぶ不気味な世相は、多数の死傷者を伴う、近年の異常気象下での台風による数々の水災害や、終息の見えないコロナ禍における感染不安と経済停滞を併せもつ今日と比べても、極めて似通った、或はそれ以上に不安漂う世相であったことが推測されます。先の災厄には明らかな人災も含まれており、平清盛による約半年間の福原（神戸）遷都は、概ね次のような有り様でした。

治承 4 年（1180 年）6 月、福原への遷都は清盛によって強行され、帝をはじめ側近の高官達、官位に就いている公家衆は全て福原に移り、新都に期待した町衆達も移動しました。その折、住居建材調達の為に、大方は京の旧居を打ち壊して木材を筏に組み、淀川に流して福原に運びました。その旧居跡は畑や荒れ地のままでしたから、旧都は急速に疲弊して、かつての都の雅はすっかり消え失せてしまいました。新都福原を訪れる機会があった長明は、立ち退きを強いられた旧住民の悲嘆や、京よりも平野部が狭い福原において尚、未だに多くの空地が残されたままの現状を目にして、“あの淀川の川幅が狭くなる程の多くの筏の木材は何処に行ってしまったのか？”と疑問を呈しています。見通しのつかない新都建設の停滞に、人心は急速に離れて京に戻る人たちが増え、遂には遷都約 170 日にして清盛も京に戻ってしまいました。多くの資材を失った京の復興も難渋したに違いありません。

福原は貿易拠点でしたから、物流・情報のハブとして期待され、遷都したのでしょう。湊や河川の利用形態は、程度の差こそあれ、時代と折り合いを付けながらも経済社会を敏感に反映しています。水運の幹線道路としての川、利水・治水としての川は正に社会の写し絵でした。今もって、自然災害についても社会的にも川面は時代を映し出しています。

「ゆく河の流れ」の中で、社会不安や被災リスクを軽減する為には、日頃から川の観察を怠ることなく、先達鴨長明に倣って、悲しい過去の記録も丹念に残して共有し、災害に備える知恵を身に着けて、これを伝承していくことが不可欠でしょう。子や孫の世代に残すべきは知恵で、心を集めた水防災文化の伝承こそ、コロナ禍中の今、見直されるべき時代にあると言えるでしょう。

（日本水防災普及センター理事・元 摂南大学大学院教授）

イベント報告

巨椋池流域見聞

7月18日（土）「淀川流域勉強会」と「水辺に学ぶネットワーク」の主催による第5回巨椋池流域見聞に参加しました。京都大学防災研究所宇治川オープンラボラトリーに集合し、巨椋池模型ビオトープの見学したのち、さすてな京都へ移動し、水災害保険と巨椋池流域の模型製作を通して学ぶ地域環境についての講演を聞くプログラムでした。

関西広域連合加藤寿昌氏による講演は、「近年の大規模水災害に対し、琵琶湖・淀川流域住民の地域生存率を引き上げるために、地域のコミュニティの共助機能を高める。このために、明確な水災情報と財源担保を提供し、地域コミュニティの再生を関西広域連合が主導する形で進める。それは治水対策において、既存の法制度では対応しきれない部分を補完する。」という内容でした。

摂南大学名誉教授澤井健二氏には、琵琶湖・天若湖・巨椋池に着目した、地域資源の発見や水辺の活用を考える市民プロジェクトについて話していただきました。（M・Y）

日本水防災普及センター「避難スイッチ講座」

8月6日（木）、日本水防災普及センターの初めての行事として、「避難スイッチ講座」がWEBで開かれました。この講座は、当初、30名程度の参加者を公募して、6月13日（土）と14日（日）に長岡京市で開催する予定でしたが、新型コロナウイルス感染拡大の影響を受けて、当センターの会員15人程度に限定して、8月6日（木）と7日（金）に行うことに変更し、さらに直前に日程を8月6日（木）のみに限定して、WEB開催となったものです。講座は、当センター澤井健二理事長による「河川と水害」、チームアクア代表谷口幸治氏による「小畑川等の河川の状況について」、水辺に学ぶネットワーク前川勝人氏による「水防災に役立つ情報の集め方」、大阪工業大学教授田中耕司氏による「避難スイッチとマイタイムライン」、当センター柳沼宜裕理事による「地形・地図、避難方法、マイ防災マップについて」、当センター仁枝洋理事による「マイ防災マップ作りの事例」の6講義からなる大変充実したものでしたが、午前9時半から午後4時半までの長丁場で、話す方も聞く方もくたくたになりました。当初2日目に予定されていた、まち歩きとマップ作りの研修は、別の機会に行いたいと考えています。（S・K）

淀川まるごと体験会

8月30日（日）に、淀川河川公園内の点野野草地区で「淀川まるごと体験会2020」が開催されました。今年は新型コロナウイルス感染拡大防止のため、参加者は関係者に限定したうえ、感染対策を徹底し、熱中症対策として11時解散という例年より短いプログラムで行われました。今回実施された催しは、カヌー、SUP、Eボート、水槽展示、芝人形作り、ブランコ、冠水道路歩行体験です。石田ゼミでは、水槽展示を担当させていただきました。水槽展示をするにあたり、まるごと体験会までの一週間は毎日点野ワンドへ足を運び、投網などを使って魚の捕獲を試みました。ゼミメンバーの努力もあり、何匹か捕獲することができましたが、水槽に入れて大学に置いている間に魚同士が傷つけあってしまいました。また、まるごと体験会当日にもギルを捕獲し水槽で展示していたのですが、水温の変化でほとんどが死んでしまうなど課題も多くありました。来年以降へしっかりと引き継ぎ、より良いイベントにできるようにしていきたいです。

新型コロナウイルスによる不安な状況が続くなか、このイベントを中止ではなく、規模を縮小して継続できたことはよかったと思います。（N・K）

今後のイベント案内

天若湖アートプロジェクト 2020　＆　近畿水環境交流会　オンライン

日時 ： 2020 年 10 月 24 日（土）15 時から 20 時

リアルタイムによる座談会や 24 日前後には天若湖アートプロジェクトを振り返るオンデマンド配信などを予定しており、特設サイトでは、天若湖アートプロジェクトの 15 年の記録、写真ギャラリーや記録映像限定公開などを予定しています。

リアルタイムスケジュール

15：00 － 16：00 トークセッション１　アート部門座談会
16：10 － 16：20 日吉町ＰＲコーナー①
16：30 － 17：30 トークセッション２　環境・川部門座談会
18：30 － 18：40 日吉町ＰＲコーナー②
18：40 － 18：50 日吉町ＰＲコーナー③
19：00 －　　「あかりがつなぐ記憶」映像上映会…あかりを見ながらの交流会
主催：天若湖アートプロジェクト実行委員会
共催：近畿水環境交流会・河川フォーラム実行委員会
お問い合わせ先：amawakaart@gmail.com

琵琶湖・淀川・大阪湾流域圏シンポジウム in 大阪 兼 第 22 回近畿水環境交流会

日時：2020 年 11 月 21 日(土)　12 時 30 分から 17 時
場所：大阪工業大学梅田キャンパス　2 階　（大阪市北区茶屋町 1-45（OIT 梅田タワー））
講演：「治水行政に関する最近の動向」
　　国土交通省近畿地方整備局　河川部長　豊口佳之氏
「琵琶湖・淀川・大阪湾流域圏における近代舟運の変遷」
　　愛知大学地域政策学部　准教授　飯塚公藤氏
費用：無料（当日参加も可能ですが、できるだけ事前（11/14 まで）に申し込みをお願いします。）
主催：琵琶湖・淀川・大阪湾流域圏シンポジウム実行委員会
（淀川流域勉強会、淀川愛好会、琵琶湖・淀川流域圏連携交流会、近畿水環境交流会・河川フォーラム実行委員会、ＮＰＯ法人近畿水の塾、水辺に学ぶネットワーク、日本水防災普及センター）

【タイムスケジュール】

12:30　ポスターセッション
13:30　開会のあいさつ
　　総合司会　：石田裕子　（摂南大学理工学部　准教授）
　　主催者代表：澤井健二　（摂南大学　名誉教授）
　　共催者代表：川野常夫　（摂南大学　副学長）
13:40　治水：国土交通省近畿地方整備局　河川部長　豊口佳之氏
14:40　休憩
14:50　文化：愛知大学地域政策学部　准教授　飯塚公藤氏
15:50　休憩
16:00　総合討論：進行　久保田洋一（NPO 法人近畿水の塾）
17:00　閉会のあいさつ　石中英司（淀川流域勉強会）
申し込み先 ： 淀川愛好会事務局へ

「新型コロナウイルス」感染拡大予防のため手指の消毒、マスク着用にご協力ください。

〈 学生の窓 11 〉

コロナ禍での学生生活

稲垣　周真

私は、2018 年に経営学部経営情報学科に入学し現在は大学 3 年生です。エコシビル部には入学前よりボランティア活動に興味があり入部しました。

今年度は新型コロナウイルス（COVID-19）の影響もあり、活動を８月まで自粛していましたが、８月末に点野地区で行われるまるごと体験会に向けて活動を小規模で再開し始めました。活動では大学側から出欠確認をとることやマスク着用必須など様々なリスク管理を求められており、炎天下での作業も相まって厳しい状況下での作業になることが予測されていましたが、活動に熱心な部員の協力もあってまるごと体験会に向けて作業することができました。

まるごと体験会では私たちエコシビル部はＥボートの運航を行いました。Ｅボートを運航する上でのコロナ対策として密にならないために少人数で乗る必要があり、船の先端のロープを陸から引っ張ることによって少ない人で陸に戻れるようにしました。

今年の一年生は大学で全体的にクラブやサークルに入りにくくなっていましたが、私たちエコシビル部は広報としてTwitterを利用しており、そこから新入部員が現時点で４名入部してくれました。少ない人数ですがエコシビル部を次の代へ繋げていけるよう頑張ります。

（摂南大学 経済学部　経営情報学科 3回生・エコシビル部）

新入部員の現状

清水　海輝

今年度の摂南大学一回生はコロナの影響のため、入学式が開催されず、それ以降の講義においても数回しか大学に行けなかった人がほとんどでした。私たちの新しい授業形式であるリモート授業はパソコンさえあればどこでも講義を受けることができました。しかし、課題の作成や提出の方式が、今までと異なるネット環境で行われ、講義について質問をしても直接教えていただくものより、言葉や文面ではわかりにくいと感じる場面もありました。また、同学年の人と直接会えないため、今までより友達もできにくい現状に対して不安や孤独感が今もなお続いています。その中で、私がエコシビル部に入部しようと決めたきっかけは、大学内だけでなく、しっかりと地域の方々とコミュニケーションを図り、活動を行なっているところに魅力を感じたからです。

今後、大学での対面授業で同じ学科の交流が増え、友達を作ったり、サークルに入ったり、今までできなかった分を取り戻す勢いで楽しい大学生活を送りたいと思っております。

（摂南大学　理工学部　生命科学科　1回生・エコシビル部）

お見舞い

この度、コロナ禍における令和２年７月豪雨は、熊本県を中心に日本各地に甚大な被害をもたらしました。ここに謹んでお見舞い申し上げます。また、今夏は例年にも増して水難事故が多かったようですが、お互いの安全対策に一層心がけたいと存じます。

編集後記

淀川愛好会もコロナ禍の影響をもろに受けて、イベント等の開催が思うようにできない中での Yodoric News 発行となりました。石田ゼミとエコシビル部の学生諸君には、研究や勉学の合間を縫って、原稿やイベント資料の収集をしていただいたことに深く感謝申し上げます。

編集長　岡﨑善久（岡﨑善久建築設計事務所）

淀川愛好会事務局：〒572-8508　寝屋川市池田中町17-８　摂南大学理工学部都市環境工学科　石田研究室内
TEL/FAX：072-839-9125
HP：　http://www.setsunan.ac.jp/civ/yodoric
E-mail：ishida@civ.setsunan.ac.jp